

中部の

エネルギーを 築いた人々

福沢桃介と川上貞奴をめぐる人々
(その1—川上貞と岩崎桃介、
二人の出会い)

2021(令和3)年は川上貞奴(本名：川上さだ)の生誕150年にあたる。コロナ禍で記念行事の開催が見送られているが、この機会に日本の女優第1号となった川上貞奴と日本の電力王・福沢桃介の事業をめぐる人々、エピソード、二人の足跡などを改めて記載する。

今回は二人の出会い、川上貞奴と川上音二郎の結婚から始まる女優生活の前半生について紹介する。



米国留学中の福沢桃介
1868(明治元)年～1938(昭和13)年
出典：福沢桃介翁伝

福沢桃介(旧姓：岩崎)との出会い

川上貞奴は1871(明治4)年、日本橋の両替商・越後屋の小山久次郎、タカの12番目の子・小山貞として生まれた。生家の没落により7歳の時に芳町の芸妓置屋・浜田屋の女将・亀吉(=可免)の養女となった。

貞は美人のおてんば娘で、小奴で座敷に出ているところから人気者であった。乗馬が好きで、栗毛の馬にまたがり、まっ赤な上着に乗馬ズボンという出で立ちで出かけることが多くあった。

また、養母の亀吉が重い病にかかった時、近くの不動堂に30日間の寒詣で、水ゴリを行った。この願いがかなうかのように亀吉の病状も回復した。これを機に貞は成田山不動明王を信仰した。

亀吉は自分の子どものように躰け、可愛がった。日舞の芸に秀で才色兼備の誉れが高く伝統ある奴の名をもらい「貞奴」を襲名した。また、時の総理大臣伊藤博文や西園寺公望など名だたる元勳から鼻眞にされ名実ともに日本一の芸妓となった。

ところで、貞奴と後に福沢家と養子縁組した岩崎桃介の二人の馴れ初めは、桃介が浅草橋で馬場辰猪(土佐藩士で岩倉使節団の一員として随行、その後、国友会を組織し自由民権運動を日本に紹介)の演説会を聞きに行った帰り両国橋を渡り、夕陽をあびながら荒川の近くまで来た時、吠え立てる多数の犬の声と馬のいななき、それに女の叫び声が聞こえた。貞奴が乗馬で成田山詣での帰り、隅田川の土手で野犬の群れに襲われ、栗馬が驚き前足を挙げていななき振り落とされそうになった。この時、桃介は手ごろの棒切れを拾って左手に持ち、大声を上げながら右手で石を投げつつ突進していった。その気迫で凶暴な野犬の群れを追い払い馬の鼻づらの手綱を素早くとり、馬の首筋をやさしくなで手際よくなだめたことで、二人は好意を持つきっかけになった。

このようなこともあって、翌日の午後、貞奴は養母の亀吉と一緒に慶應義塾の寄宿舎を訪れ、その後親しく行き来するようになった。

桃介と房との出会い

福沢諭吉は、明治維新になって欧米諸国の女性解放思想をいち早く紹介した。女も男も同じ人間であるため女性にも自由を与え、同様の教育を受ける権利があると主張し、日本婦人論を刊行した。また、自身も1863(文久3)年から20年間の間に4男5女の子どもに恵まれた。子どもたちは一人も早世することなく育ち、娘に幼児より芸事を受けさせ、家族愛が強く子煩悩であった。

諭吉は長女の里はしっかり者で、どこに嫁に出しても勤まるが、次女のお房は美人ではあるが、少しぼんやりしているので、養子をとって親が面倒を見なければと考えていた。



福沢 房(福沢諭吉の2女)
1870(明治3)年～1954(昭和29)年
出展:電力王福沢桃介展・でんきの科学館

婿探しをしていたころ、1886(明治19)年の秋、第1回慶應義塾の体育会が開催された。目立ちたがり屋の桃介は、絵の上手い友人が大きな口を開けて吠えているライオンの顔を描いた真っ白いメリヤスのシャツを着て、敏捷に飛び回った。これを見て、諭吉の奥さんの錦と長女の里が房の婿として白羽の矢を立てたのが桃介で、房も次第に恋するようになった。

諭吉はこれまでの行状から桃介の軽躁を知っているの、あまり乗り気ではなかった

が、一途な気持ちになっている房と家内の意向を入れて桃介を婿養子にすることにした。そして明治19年12月9日付で岩崎桃介の両親に次のような「大意」と題する縁組趣意書を送った。

「大意」

- 一、岩崎桃介を福沢諭吉の養子として貰い受くる事。
- 二、養子は、諭吉相続の養子にあらず。諭吉の次女お房へ配偶して別居する事。
- 三、別家の上は、福沢諭吉夫婦より、居家書生の儀につき心付の件は忠告も致すべく候えども、凡俗普通いところの舅姑の關係を持って、みだりに桃介お房の家事に干渉する事なかるべし。
- 四、養子の相談ととのい候上は、桃介は直ちに米国もしくは英国へ留学いたすべき事。
- 五、留学の費用は、かねて福沢家にてお房洋行のため用意の資金これ有るにつき、その金を桃介の洋行学費に流用いたすべき事。
- 六、外国留学の期限は、先づ三ヶ月を約する事。
- 七、留学帰朝の後は、ただちに婚姻いたすべきなれども、桃介が職に就くまでは、福沢家にて見苦しからざるよう生活の資金を給すべき事。
- 八、桃介夫婦の間は、男尊女卑の旧弊を払い、貴婦人・紳士の資格を維持し、相互に礼を尽くして、もって一家の美を致すのみならず、広く世間の模範たるよういたすべき事。

大凡上記の如し 明治19年12月9日夜
諭吉記 妻 立会にて

こうして婚約が整った1887(明治20)年2月アメリカに向けて出発、2年8ヶ月後の明治22年に帰国、11月に房と結婚式を挙げた。

貞奴は川上音二郎と結婚

川上音二郎は1864（元治元）年、福岡藩郷士で藍問屋・川上専蔵の子として生まれた。継母との折り合いが悪く、出奔し東京に出た。その後、増上寺の小僧をしていた時に毎朝散歩に来る福沢諭吉と出会い、慶應義塾の学僕となったりしたが長続きせず、自民党の壮士、立憲帝政党员になり自由童子と名乗った。

川上一座は書生や壮士を集め1887（明治20）年に旗揚げ、1889（明治22）年から世情を風刺した「オッペケペー節」を寄席で歌い一世を風靡した。

1891（明治24）年、浅草鳥越座で「板垣君

遭難実記」を上演中、貞奴と音二郎が初めて出会い、1894（明治27）年、伊藤博文の腹心で、貴族議員の金子堅太郎の媒酌で結婚した。

1896（明治29）年、神田三崎町に川上座を建築し開場、川上音二郎戦地見聞日記などの戦争劇を上演、好評を博した。しかし、1898（明治31）年から2度にわたる衆議院選挙に落選、資金難に陥り川上座を手放した。世間の非難に耐えかね、日本丸と名付けたボートで日本脱出を試みたが失敗、神戸に漂着し一命をとりとめた。

世界をひのき舞台として活躍

1899（明治32）年から翌年に川上一座を結成し第1回海外公演に出発した。

サンフランシスコでは、出しものとして道成寺を演出した。このとき、アメリカでは女形が存在が理解されず、ついに貞が舞台上がることになった。芸名をつけることになり、ヤッコやサダでは短すぎて、芸名を「サダヤッコ」とすることに決まった。ここに名実ともに「貞奴」が誕生した。アメリカでは旅芸人を受け入れる文化があり、シアトル、シカゴ、ボストン、ワシントン、ニューヨークなど各地を回った。そしてワシントンでは日本大使館で当時のマッキンレー大統領などが出席、貞奴の演技を絶賛した。

その後ヨーロッパへ渡り、ロンドンではバッキンガム宮殿で日本流の舞台が設営され、ウエールズ親王殿下も上覧された。続いてパリ万国博覧会に招かれ、ロイ・フラワー劇場で公演、彫刻家ロダンも賞賛の声を発した。また、当時のミール・ルーベ大統領が官邸で開いた園遊会に招待され、道成寺を踊り、貞奴の美貌と演技でドビュッシーやピカソなども絶賛し、パリ社交界の常連となった。そして、フランス政府はオフィシエ・ド・アカデミー



ピカソが描いた貞奴
（パリに出て間もない19歳時のコンテ画）
出典：「春の波濤・NHK大河ドラマ・ストーリー」

勲章を授与した。

1901（明治34）年、第2回海外公演に出発、イギリス、フランス、ベルギー、ドイツ、イタリア、ロシアからウラジオストックなどで興行、特にロシアではマリンスキー劇場でニコライ2世が皇后陛下とともに上覧され、金時計を授かり、川上一座は深く感激して帰国した。



パリ公演「道成寺」の舞台
(中央の貞奴は日仏などの国旗を染めた着物—明治34年)
出典:「春の波濤・NHK大河ドラマ・ストーリー」

帰国後の1903(明治36)年、日本で初めて

のセリフ劇「オセロ」、引続き「ハムレット」「ヴェニスの商人」などを日本バージョンで上演し、歌舞音曲のない演劇を日本に定着させようとした。

音二郎は興行師としても1910(明治43)年、大阪堂島に大阪帝国座を落成、同所に後進の女優を育成するため帝国座付属俳優養成所を開設、その後、帝国劇場付属女優養成所に引継がれた。さらに福岡博多に洋風建築の博多座を建設したが、疲労が重なり川上音二郎は1911(明治44)年に腹膜炎で亡くなった。新派合同葬が行われ博多駅近くの承天寺に葬られた。

その後、貞奴は意志を引継ぎ、貞奴一座を率い日本各地を巡演したが、1917(大正7)年に大阪中座で引退興行を行い、日本女優第1号として舞台から退いた。

帝国劇場の建設と帝国女優養成所

1911(明治44)年に有楽町、日比谷公園近くに開業した東洋一の帝国劇場について触れたい。この建設を主導したのは現在放映中のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公・渋沢栄一である。当時、日清・日露戦争に勝利した日本は世界の一等国に肩を並べたと自負したが、これはあくまでも軍事力・経済力のこと、一般庶民でも気軽に楽しめる文化・芸術を振興する必要があると考え劇場の開設を呼びかけた。



1911(明治44)年、開業当時の帝国劇場
出典:「帝国劇場開幕、嶺 隆著」

1907(明治40)年、帝国劇場株式会社(資本金:120万円)の創立総会を開催、渋沢栄一を取締役会長、取締役は大倉喜八郎(大倉財閥系)、益田太郎(三井財閥系)、荘田平五郎(三菱財閥系)、福沢桃介(大正15年に帝国

劇場会長就任)、日比翁助(三越百貨店創業者)、監査役に浅野総一郎(浅野セメント)など各財界の錚々たる人物が就任した。そして欧米巡業から帰国した川上音二郎を招いて女優養成などの劇団会を催すなど開業に向けての準備が進められ、日本で初めての西洋式劇場である帝国劇場が建てられ、演劇の普及と向上に多くの活動を展開した。

ここに、1908(明治41)年9月16日付東京朝日新聞記事・女優養成所開所式の式辞で、渋沢栄一男爵は「従来世間から卑しめられていたものが三つある。一つは私のような商人で、これを素町人といったものだ」と古今集や荻生徂徠を引張りだしてかんで含めるような説明を与え、「次は女子と俳優だ。女子と小人は養い難し、また役者はかわら者と世間から賤しめられたものだ、私はその賤しめられた一の素商人の立場から、大いに女子と役者に同情を表する」と手前味噌やお世辞を振りまいた。これが終わると最後に貞奴が現れ、「精々品行を慎みますから、どうぞ皆様お助けを願います」と大芝居をやって、めでたく開所式を終えたと記載された。

なお、川上貞奴、川上音二郎、福沢桃介3人の年譜は次の通りである。

川上貞奴・川上音二郎・福沢桃介の年譜（＊印：川上音二郎関連）

川上貞奴・川上音二郎	和暦	西暦	福沢桃介
＊福岡県博多区で生まれる	文久4	1864	
	明治元	1868	埼玉県比企郡吉見町で生まれる
東京・日本橋で生まれる、 本名：小山貞	明治4	1871	
＊増上寺の納僧、慶應義塾の学僕、 芸妓置屋「浜田屋」の浜田亀吉の養 女となる	明治11	1878	
＊「自由童子」と名乗り自由民権の政 談演説 貞、浜田屋から半玉「子奴」の名で 出る	明治16	1883	川越中学3年生から慶應義塾に入学
成田山詣で行き、帰路に岩崎桃介に 出会う	明治18	1885	
	明治19	1886	福沢家と養子縁組
「奴」の源氏名で芸者となる	明治20	1887	アメリカに留学(2年8ヶ月滞在)
	明治22	1889	北海道炭鉱鉄道に入社
劇場取締規則改正（舞台での男女差 別解禁）	明治23	1890	
＊浅草鳥越座で「板垣君遭難実記」上演 ＊貞と音二郎初めて出会う 「オッペケペー節」全国に広がる	明治24	1891	
＊音二郎渡仏 貞は芸者をしながら川上座の面倒 を見る	明治26	1893	
新劇俳優の川上音二郎と結婚 （仲人：金子堅太郎）	明治27	1894	結核で養生園に入院、療養生活
	明治28	1895	株取引千円の元手で10万円儲ける
＊川上音二郎、神田三崎町に川上座 を開設	明治29	1896	
＊音二郎が衆議院選挙に落選	明治31	1898	王子製紙取締役就任、利根川水力発 起人総代
アメリカ巡業で、わが国最初の女優 「貞奴」となり活躍（サンフランシス コ、シカゴ、ボストン）	明治32	1899	京橋に丸三商店設立(約1年後閉店)
ワシントン：日本公使館で夜会、英 国：バッキンガム宮殿、パリ万国博 覧会ロイ・フラワー劇場で公演	明治33	1900	
世界的俳優音二郎、貞奴として帰国、 再渡欧	明治34	1901	福沢諭吉先生亡くなる
			北海道炭鉱鉄道に再入社（約5年余 勤務）
＊「オセロ」のデズデモーナ役で舞台 に立つ	明治36	1903	
＊東京、芝に帝国女優養成所設立	明治41	1908	博福電気軌道設立発起人、豊橋電気 株取締役就任
＊大阪、北浜・堂島に帝国座完成 帝国座付属俳優養成所を開設	明治43	1910	名古屋電灯株取締役、常務取締役に 就任(約半年後辞任)
＊川上音二郎死去、新派合同葬	明治44	1911	四国水力電気、野田電気、浜田電気 の取締役社長に就任

貞奴一座を率い日本各地、朝鮮、満州を巡演	明治45	1912	千葉県選出の代議士に当選（政友会公認・1期3年）
	大正2	1913	再度名古屋電灯㈱常務、翌年取締役社長に就任
	大正3	1914	愛知電気鉄道株式会社取締役社長に就任
女優引退を宣言	大正5	1916	電気製鋼所設立、翌年取締役社長に就任
大阪中座で引退興行	大正6	1917	
名古屋市北区大曽根に川上絹布㈱を設立	大正7	1918	東海電極製造㈱設立、相談役に就任
			木曽電気製鉄㈱設立、取締役社長に就任
名古屋市東区に二葉荘を建設	大正8	1919	矢作水力㈱設立、相談役に就任（社長：長男の福沢駒吉）
			東海道電気鉄道㈱取締役社長に就任（大正11年、愛知電気鉄道に合併）
			大阪送電㈱設立、取締役社長に就任
	大正9	1920	大同電力㈱社長に就任（木曽電気興業、日本電力、大阪送電を合併）
	大正10	1921	関西電気㈱社長に10月就任、12月に辞任（名古屋電灯、関西水力電気が合併）
			大同製鋼㈱を設立、取締役社長に就任
	大正11	1922	東邦電力㈱相談役に就任（関西電気と九州電灯鉄道が合併・本社を東京に移転）
			東邦瓦斯を設立（名古屋瓦斯を合併）
			北恵那鉄道㈱取締役社長に就任
川上児童劇団を結成	大正13	1924	
	大正15	1926	天竜川電力㈱取締役社長に就任
			帝国劇場㈱取締役会長就任
			東京に別荘「桃水荘」を建設、東京に移転
	昭和3	1928	実業界から引退
	昭和6	1931	貞照寺地鎮祭に臨席
岐阜県各務原市鵜沼に貞照寺建立	昭和8	1933	
東京に転居	昭和12	1937	
	昭和13	1938	東京の渋谷本邸で死去
鵜沼に疎開	昭和20	1945	
熱海の別荘で死去	昭和21	1946	
「二葉御殿」移築「文化のみち二葉館」開館	平成17	2005	

「福沢桃介翁伝」「自伝音二郎・貞奴」を参考に作成

（寺沢 安正）